

日蓮大聖人御書全集

せんいちあまごへんじ

千日尼御返事

新版
1748
ゝ
1753

せんにちあまごへんじ

千日尼御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

せんにちあま

弘安3年('80)

7月2日

59歳

千日尼

がもくいっかんごひやくもん

海苔

和布

干飯

品々

もの

鵜目一貫五百文・のり・わかめ・ほしい、しなじなの物、

た　そうら　お

ほけきよう

ごほうぜん　もう

あ

そうろう

給び候い了わんぬ。法華経の御宝前に申し上げて候。

ほけきよう　い

にやくうもんぼうしや

むいちふじようぶつ

ほう

き

法華経に云わく「若有聞法者、無一不成仏（もし法を聞く

ひと

じようぶつ

うんぬん

ことあらば、一りとして成仏せざることなけん」云々。

もんじ　じゆうじ

そうら

ほけきよう

いっく　読

そうら

文字は十字にて候えども、法華経を一句よみまいらせ候

しやかによらい

いちだいししようぎよう

残

よ

そうろう

えども、釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候

ゆえ

みようらくだいしい

ほっけ

ひろ

なるぞ。故に、妙楽大師云わく「もし法華を弘むるには、

いちぎ

しょう

みないちだい

こん

しまつ

きわ

およそ一義を消するも、皆一代を混じてその始末を窮む

とううんぬん

し

もう

けごんぎよう

まつ

もう

ねはんぎよう

けごんぎよう

等云々。「始」と申すは華嚴経、「末」と申すは涅槃経。華嚴経

もう

ほとけ

さいしよじようどう

とき

ほうえ

くどくりんとう

だいぼさつ

と申すは、仏、最初成道の時、法慧・功德林等の大菩薩、

げだつがつぼさつ

もう

ぼさつ

こ

おもむ

ぶつぜん

説

解脱月菩薩と申す菩薩の請いに趣いて、仏前にてとかれて

そうろう

きよう

てんじく

りゆうぐうじよう

とそつてんとう

し

にほん

候。その経は、天竺・竜宮城・兜率天等は知らず、日本

こく

渡

そうろう

ろくじつかん

はちじつかん

しじつかんそうろう

まつ

国にわたりて候は六十卷・八十卷・四十卷候。「末」と

もう

だいいねはんぎよう

がつし

りゆうぐうとう

し

わ

ちよう

申すは涅槃經。これも月氏・竜宮等は知らず、我が朝に

しじつかん

さんじゅうろつかん

ろつかん

にかんとう

ほか

は四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり。これより外の

あごんきよう

ほうどうきよう

はんにやきようとう

ごせん

しちせんよかん

阿含經・方等經・般若經等は、五千・七千余卷なり。

きようぎよう

み 聞

そうら

ほけきよう

いち

これらの経々は見ずきかず候えども、ただ法華経の一

じいつく 読

そうら

かれがれ

きようぎよう

いちじ

落

読

字一句よみ候えば、彼々の経々を一字もおとさずよむに

そうろう

たと

がっし

にほん

もう

にじ

にじ

ご

て候なるぞ。譬えば、月氏・日本と申す二字、二字に、五

てんじく じゆうろく

たいこく

ごひやく

ちゆうこく

じゆうせん

しようこく

むりよう

ぞくさん

天竺、十六の大国、五百の中国、十千の小国、無量の粟散

こく だいち

たいさん

そうもく

にんちくとう

納

たと

国の大地・大山・草木・人畜等おさまれるがごとし。譬え

かがみ

いっすん

にすん

さんずん

しすん

ごすん

そうら

ば、鏡はわずかに一寸・二寸・三寸・四寸・五寸と候え

いっしやく

ごひやく

ひと

浮

いちじよう

にじよう

じゆうじよう

ども、一尺・五尺の人をもうかべ、一丈・二丈・十丈・

ひやくじよう

たいさん

映

きようもん

読

百丈の大山をもうつつすがごとし。されば、この经文をよ

み そうら

きよう

聞

ひと

いちにん

欠

ほとけ

成

みて見候えば、この経をきく人は一人もかけず仏になる

もう もん
と申す文なり。

くかい ろくどう いっさいしゅじょう おのおのしんしん 変

九界・六道の一切衆生、各々心々かわれり。譬えば、

にん さんにん ないしひやくせんになんそうら いっしやく かお うち 実

二人・三人、乃至百千人候えども、一尺の面の内、じち

似 ひといちにん こころ 似 かお

ににたる人一人もなし。心のにざるゆえに面もにず。まし

にん じゅうにん ろくどう くかい しゅじょう こころ 変

て二人・十人、六道・九界の衆生の心いかながかわりて

そうろう はな 愛 つき 酸 好

候らん。されば、花をあいいし、月をあいいし、すきをこのみ、

苦 小 おお

にがきをこのみ、ちいさきをあいいし、大いなるをあいいし、

色 々 ぜん あく 品 々

いろいろなり。善をこのみ、悪をこのみ、しなじななり。

色 々 そうら ほけきよう い

かくのごとくいろいろに候えども、法華經に入りぬれば、

ただ一人の身、一人の心なり。譬えば、衆河の大海に入つ

ただ一人の身

一人の心

譬えば

衆河の大海

に入つ

て同一の鹹味なるがごとく、衆鳥の須弥山に近づいて一色

て同一の鹹味

なるがごとく

衆鳥の須弥山

に近づいて

一色

なるがごとし。提婆が三逆と羅睺羅が二百五十戒と、同じ

なるがごとし

提婆

三逆

と羅睺羅

が二百五十戒

と、同じ

同じ

同じ

く仏になりぬ。妙莊嚴王の邪見と舍利弗が正見と、同じ

く仏になりぬ

妙莊嚴王

の邪見

と舍利弗

が正見

と、同じ

同じ

同じ

く授記をこうぼれり。これ即ち「一りとして成仏せざる

く授記をこうぼれり

これ即ち

「一りとして

成仏せざる

ことなけん」のゆえぞかし。

ことなけん

のゆえぞかし

四十余年の内の阿弥陀経等には、舍利弗が七日の百万反、

四十余年

の内の阿弥陀経等

には

舍利弗

が七日

の百万反

嫌

大善根ととかれしかども、「いまだ真実を顕さず」ときらわ

大善根

ととかれしかども

「いまだ真実

を顕さず

ときらわ

れしかば、七日ゆをわかして大海になげたるがごとし。

れしかば

七日ゆをわかして

大海になげたる

がごとし

いだいけ かんぎよう 読 むしようにん え しようじき ほうべん

韋提希が觀經をよみて無生忍を得しかども、「正直に方便

す 捨 捨 ほけきよう しん かえ もと

を捨つ」とすてられしかば、法華經を信ぜずば返つて本の

によにん だいぜん もち ほけきよう あ 何

女人なり。大善も用いることなし、法華經に値わらずばなにせ

だいあく 歎 いちじよう しゆぎよう だいば あと

ん。大惡もなげくことなかれ、一乗を修行せば提婆が跡を

繼 みな ひと じようぶつ

もつぎなん。これらは皆「一りとして成仏せざることなけ

きようもん 虚 故

ん」の經文のむなしからざるゆえぞかし。

こあぶつぼう しょうりよう いま 御座

されば、故阿仏房の聖靈は今いずくんにかおわすらん

ひと うたが ほけきよう みようきよう かげ 浮

と人は疑うとも、法華經の明鏡をもつてその影をうかべ

そうら りようじゆせん やま なか たほうぶつ ほうとう うち ひがし

て候えば、靈鷲山の山の中に、多宝仏の宝塔の内に、東

向

にちれん

み

そうろう

むきにおわすと日蓮は見まいらせて候。もしこのこと

虚 事

そうら

にちれん

僻 目

そうら

しゃか

そらごとにて候わば、日蓮がひがめにては候わず。釈迦

によらい

せそん

ほうひさ

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

如来の「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたも

おんした

たほうぶつ

みようほけきよう

みな

しんじつ

うべし」の御舌と、多宝仏の「妙法華経は、皆これ真実な

ぜつそう

しひやくまんおくなゆた

こくど

麻

稲

り」の舌相と、四百万億那由他の国土にあさのごとく、いね

ほし

たけ

簇

々

隙

のごとく、星のごとく、竹のごとく、ぞくぞくとひまもな

つら

居

しよぶつによらい

いちぶつ

欠

たま

く列なりいておわしましし諸仏如来の、一仏もかけ給わず

こうちようぜつ

だいぼんのうぐう

さ

つ

おんした

広長舌を大梵王宮に指し付けておわせし御舌どもの、

鯨

し

腐

鰯

寄

集

くじらの死んでくされたるがごとく、いやしのよりあつま

腐

みないちじ

朽

じつぽうせかい

りてくされたるがごとく、皆一時にくちくされて、十方世界

しよぶつによらい

だいもうご

つみ

落

じゃつこう

じょうど こん

の諸仏如来、大妄語の罪におとされて、寂光の浄土の金

瑠璃

だいち

破

だいば

むけんだいじょう

るりの大地、はたとわれて、提婆がごとく無間大城にかつ

い

ほうれんこうびくに

み

だいもうご

みょうか

ぱと入り、法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の猛火ぱと

出

じつぽうけおう

はな

園

いちじ

かい

燼

ち

いでて、実報華王の花のその一時に灰じんの地となるべし。

そうろう

こあぶつぽういちにん

じゃつこう

いかでか、さることは候べき。故阿仏房一人を寂光の

じょうど

い

たま

しよぶつ

だいく

お

たも

浄土に入れ給わずば、諸仏の大苦に堕ち給うべし。ただお

もの

み

もの

み

ほとけ

実

虚

ごと

いて物を見よ、ただおいて物を見よ。仏のまこと・そら事

み たてまつ

は、これにて見奉るべし。

さては、おとこははしらのごとし、女はなかわのごとし。

あし

によにん

み

はね

おとこは足のごとし、女人は身のごとし。おとこは羽のご

おんな

身

はね

身

別

々

何

とし、女はみのごとし。羽とみとべちべちになりなば、なに

飛

倒

桁

ち

お

をもつてかとぶべき。はしらたおれなば、なかわ地に墮ち

家

夫

ひと

魂

なん。いえにおとこなければ、人のたましいなきがごとし。

公事

誰

言

合

もの

誰

くうじをばたれにかいいあわせん。よき物をばたれにか

養

いちにちふつか

違

覚

東

やしなうべき。一日二日たがいしをだにもおぼつかなしと

思

去年

さんがつ

にじゅういちにち

別

去年

おもいしに、こぞの三月の二十一日にわかれにしが、こども

待

暮

見

ことし

既

しち

月

まちくらせどもみゆることなし。今年もすでに七つきにな

りぬ。たといわれこそ来らずとも、いかにおとずれはなか

散

はな

咲

落

このみ

生

るらん。ちりし花もまたさきぬ。おちし菓もまたなりぬ。

はる
かぜ

変

あき

景
色

去年

春の風もかわらず、秋のけしきもこぞのごとし。いかにこ

いちじ

変

もと

つき

い

の一事のみかわりゆきて、本のごとくなかるらん。月は入つ

出

くも

消

きた

ひと

い

帰

てまたいでぬ。雲はきえてまた来る。この人の出でてかえら

てん

恨

ち

歎

そうら

ぬことこそ天もうらめしく地もなげかしく候えとこそ

思

急

ほけきよう

糧

料

侍

おぼすらめ。いそぎいそぎ法華経をろうりようとたのみま

たま

霊

山

じようど

詣

たま

見

いらせ給いて、りようぜん浄土へまいらせ給いて、みまい

たも

らせさせ給うべし。

そもそも、子こはかたきと申す経文もあり。「世人せにん、子この

もろもろ つみ つく もん くまたか わし もう 鳥

ために衆の罪を造る」の文なり。鵬・鷺と申すとりは、

親 じひ やしな こ 返 じき きようちよう

おやは慈悲をもつて養えば、子のかえりて食とす。梟鳥

もう 鳥 う かなら はは 食 ちくしよう

と申すとりは、生まれては必ず母をくらう。畜生かくの

ひと なか 波 琉 璃 おう こころ 行 ちち くらい うば

ごとし。人の中にも、はるり王は心もゆかぬ父の位を奪い

と あじやせおう ちち ころ あんろくざん ようぼ 殺 あんけい

取る。阿闍世王は父を殺せり。安禄山は養母をころし、安慶

緒と申す人は父・安禄山を殺す。安慶緒は子・史思明に殺さ

しよ もう ひと ちち あんろくざん ころ あんけいしよ こ ししめい ころ

れぬ。史思明は史朝義と申す子にまたころされぬ。これは

敵と申すもことわりなり。善星比丘と申すは教主釈尊

かたき もう 理 ぜんしようびく もう きようしゆしやくそん

の御子なり。みこ 苦得外道をかたらいて、く とくげ どう 度々父の仏を殺し

たてまつ

奉らんとす。

また、子は財と申す経文もはんべり。こ たから もう きようもん 所以は経文に云

むすこ ふく ついしゆ

だいこうみようあ

じごく

わく「その男、福を追修するをもつて、大光明有つて地獄

て

ふぼ

しんじん

おこ

とううんぬん

を照らし、その父母をして信心を發さしむ」等云々。たと

ぶっせつ

め

まえ

み

そうろう

い仏説ならずとも、眼の前に見えて候。

てんじく

あんそくこくおう

もう

だいおう

うま

好

天竺に安息国王と申せし大王は、あまりに馬をこのみて

飼

のち

飼

慣

どんば

りようま

かいしほどに、後にはかいなれて鈍馬を竜馬となすのみな

うし

うま

けつく

ひと

うま

乗

たま

らず、牛を馬ともなす。結句は人を馬となしてのり給いき。

くに ひと

歎

し

くに

ひと

うま

その国の人、あまりになげきしかば、知らぬ国の人を馬と

たこく

しょうにん 行

くすり

飼

うま

なす。他国の商人ゆきたりしかば、薬をかいて馬となし

み 馬屋

繫

付

わ

くに

恋

て、御まやにつなぎつけぬ。なにとなけれども我が国はこい

うえ

さいし

殊

恋

忍

難

許

しき上、妻子ことにこいしくしのびがたかりしかども、ゆる

帰

帰

すことなかりしかば、かえることなし。またかえりたりと

姿

よし

ちようせき

歎

も、このすがたにては由なかるべし。ただ朝夕にはなげき

いちにん

こ

ちち

待

時

過

のみしてありしほどに、一人ありし子、父のまちどきすぎ

ひと

ころ

やまい

しず

こ

しかば、「人にや殺されたるらん、また病にや沈むらん、子

み

ちち

尋

出

立

の身として、いかでか父をたずねざるべき」といでたちけ

れば、母なげくらく「男も他国にてかえらず。一人の子もす

行

われ

こ

父

ててゆきなば、我いかんがせん」となげきしかども、子、ちち

恋

あんそくこく

たず

行

のあまりにこいしかりしかば、安息国へ尋ねゆきぬ。

しょうか

宿

そうら

いえ

あるじもう

様

ある小家にやどりて候いしかば、家の主申すよう「あ

不
便

和
殿

幼

見
目
形

らふびんや、わどのはおさなきものなり。しかもみめかたち

ひと

勝

われ

いちにん
こ

たこく

行

死

人にすぐれたり。我に一人の子ありしが、他国にゆきてしに

わ
こ

やしけん、またいかにてやあるらん。我が子のことをおも

見

目
当

もう

えば、わどのをみて、めもあてられず。いかにと申せば、

くに

おお

歎

あ

くに

だいおう

うま

この国は大いなるなげき有り。この国の大王、あまり馬を

好 たま ふしぎ くすり もち たま いちよう 狭 くさ

このませ給いて、不思議の薬を用い給えり。一葉せばき草

食 ひと うま はひろ くさ うま

をくわすれば、人、馬となる。葉広き草をくわすれば、馬、

ひと ちか たこく しょうにん あ くさ

人となる。近くも他国の商人の有りしを、この草をくわせ

うま だいいち 御馬屋 ひどう 繫

て馬となして、第一のみまやに秘蔵してつなぐれたり」と申

なん 聞 わ ちち うま な

す。この男これをきいて、「さては我が父は馬と成つてけり」

思 かえ と い うま け

とおもいて、返つて問うて云わく「その馬は毛はいかに」

問 いえ あるじこた い くりげ うま かたしろ

とといければ、家の主答えて云わく「栗毛なる馬の、肩白

斑 もう 者 聞

くまだらなり」と申す。このもの、このことをききて、と

計 おうぐう ちか はひろ くさ 盗 取

こうはからいて王宮に近づき、葉広き草をぬすみとりて、我

わ

うち うま

が父の馬になりたりしに食くわせしかば、本もとのごとく人ひととな

くに だいおう ふしぎ 思

りぬ。その国の大王、不思議なるおもいをなして、孝養こうようの者もの

うち こ 預

なりとて父を子にあずけ、それよりついに人を馬うまとなすこ

止

と、とどめられぬ。

こ たず 行

子ならずば、いかでか尋ねゆくべき。目連尊もくれんそんじや者は母の餓鬼がき

く 救 じようぞう じようげん ちち じゃけん

の苦をすくい、浄蔵・浄眼は父の邪見をひるがえす。こ

善 こ おや たから 故

れよき子の親の財となるゆえぞかし。

こあぶつししょうりよう にほんこくほつかい しま 夷

しかるに、故阿仏聖靈は、日本国北海の島いびすのみな

ごしょう 恐 しゅつけ ごしょう ねが

りしかども、後生をおそれて出家して後生を願ねがいしが、

るにん にちれん あ ほけきよう たも こぞ はる ほとけ 成

流人・日蓮に値って法華經を持ち、去年の春、仏になりぬ。

しだせん やかん ぶつぼう あ しょう 厭 し ねが

尸陀山の野干は、仏法に値って生をいとい死を願って

たいしやく う あぶつしようにん じよくせ み いと ほとけ

帝釈と生まれたり。阿仏上人は濁世の身を厭って仏にな

たま こ とうくろうもりつな あと 繼 いっこう

り給いぬ。その子・藤九郎守綱は、この跡をつぎて一向

ほけきよう ぎようじや こぞ しちがつふつか ちち しやり くび

法華經の行者となりて、去年は七月二日、父の舍利を頸に

か いっせんり さんかい へ こうしゅうは きい み のぶさん のぼ

懸け、一千里の山海を経て、甲州波木井身延山に登って

ほけきよう どうじよう 納 ことし しちがつついたち み

法華經の道場にこれをおさめ、今年はまだ七月一日、身

のぶさん のぼ じぶ 墓 はいけん こ 過 たから

延山に登って慈父のはかを拝見す。子にすぎたる財なし、

こ たから なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

子にすぎたる財なし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

しちがつふつか

七月二日

にちれん

かおう

日蓮

花押

こあぶつぼうのあまごぜんごへんじ

故阿仏房尼御前御返事

国府 にゅうどうどの あま 御 前

歎

い

そうろう

この入道殿の尼ごぜんのこと、なげき入つて候。

恋

もう

伝

たま

また、こいしこいしと申しつたえさせ給え。

お

もう

きぬ

そ

けさひと

進

そうろう

ぶんごぼう

追つて申す。絹の染め袈裟一つ、まいらせ候。豊後房

もう

すで

ほうもん

にほんこく

広

そうろう

ほくりくどう

に申さるべし。既に法門、日本国にひろまりて候。北陸道

ぶんごぼう

靡

がくしよう

かな

をば豊後房なびくべきに、学生ならでは叶うべからず。

くがつじゅうごにち いぜん

急

参

数

しょうぎよう

九月十五日已前にいそぎいそぎまいるべし。かずの聖教

につき

をば、日記のごとく、たんば房にいそぎいそぎつかわすべ

丹波ぼう

遣

やまぶしぼう

もう

渡

し。山伏房をば、これより申すにしたがいて、これへはわた

やまぶし 不便

そうろう

よろこ

い

そうろう

すべし。山伏ふびんにあたられ候こと、悦び入つて候。